

## 教科書で「道徳」を教えることはできるのか？ ——修身教育から見る道徳教育批判——

香川七海(日本大学大学院)

### 「道徳の教科化」という教育政策

このところ、「道徳の教科化」が話題になっています。道徳教育を充実させようとする人々は、青少年による凶悪犯罪がいついであるとか、青少年の道徳意識が低下しているとか、そうした問題意識から、「道徳の教科化」を実現させようと考えているようです。しかしながら、『警察白書』や『犯罪白書』などに代表される統計資料や研究者による専門的な研究(たとえば、土井隆義『少年非行の消滅』(信山社、2003)／広田照幸『教育言説の歴史社会学』(名古屋大学出版会、2001)／管賀江留郎『戦前の少年犯罪』(築地書館、2007)などの文献が挙げられます)を参照すれば、青少年の道徳意識は、それほど低下しているわけではなく、青少年による凶悪犯罪も増加しているわけではないということは明らかなことです。このように見てくると、「道徳の教科化」によって、いま、この時代に道徳教育を充実させるという教育政策は本当に必要なものなのかどうか、よくよく考えてみなければならぬといえるでしょう。

当然のことながら、道徳教育の充実をはかろうとする教育政策が採用されると、道徳のテキストの作成をはじめとして、そこには歴大な額の税金が投入されることとなります。道徳教育の充実といえば、「なんとなく、いいことをやってそう」と思われがちなところがありますが、これまでのさまざまな「税金の無駄づかい」の事例をふり返ってみると、「なんとなく、いいことをやってそう」と思えるような政策も、実態はそうではなかったということが、しばしばありました。では、「道徳の教科化」という教育政策は、本当に税金を投入して推進するに値するものなのでしょうか。この点について、戦前の修身教育の歴史を踏まえつつ、ささやかながら、検討を進めてみたいと思います。

### 戦前の修身教育から学ぶもの

道徳教育を充実させるべきという要求は、修身教育が廃止されて以来、これまで多くの政治家たちによって主張されてきました。しかし、そうした政治家たちのほとんどは、教育学域の専門的な知識を持っていなかったため、道徳教育の充実といえば、道徳の教科書をつくらせたり、教科書の内容を工夫させれば、それだけで青少年の道徳意識を高められるというふうに考えていたようです。ですから、彼らの主張する道徳教育の充実とは、道徳の教科書の充実とイコールのものとして考えてよいでしょう。

しかし、教科書を中心的な教材とする道徳教育のスタイルには、そもそも大きな問題点があるのです。それは、教科書の記述をいくら充実させても、青少年がその内容に共鳴し、自身の価値観や生き方を変化させることになるとは必ずしもいえないということです。当然のことですが、多様な価値観を持つ人間のひとりひとりには、感性の違いはもちろんのこと、読解力や語彙力という、いわゆる「学力」の違いもそなわっています。ですから、教室にいる何十人もの青少年が道徳の教科書を読んだところで、ただちにその内容に共鳴し、みずからの価値観や生き方を変化させるということなど、絶対にありえないことなのです。道徳教育の充実を主張する人々の意見に耳を傾けると、彼らの多くは、教科書の内容がすべて青少年の道徳意識に反映されるかのように考えているようですが、それは、あまりにも楽天的な発想だといえるでしょう(とくに、修身科の教科書を好意的に評価する人たちは、その典型例です)。

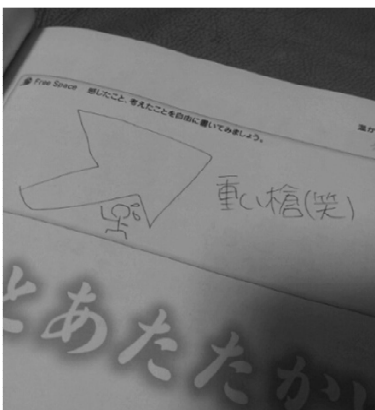
なお、教科書で道徳を教えることの困難さについては、戦前から多くの指摘がありました。たとえば、大島正徳という哲学者は、1924年に出版された、『自治及修身教育批判』(教育研究会)という文献のなかで、当時の小学校修身科の教科書は、「文章が無味乾燥であり、子どもの実生活とかけ離れた江戸時代の話が多く掲載されている。そうした理由から、子どもたちは興味なさそうに、いやいやながら教科書を読んでいる」と述べています。また、こうした教科書は、教師からも支持されていなかったようで、大島は、当時の修身科の授業の様子について、「ある教師は、教科書を邪魔者扱いにしているし、あ

る教師は、まったく教科書を使っていない」とも指摘しています。しかし、それでも修身科の授業をきちんとやっている教師は、まだいいほうで、学校によっては、修身科の時間を「書き方」や唱歌の時間に振り替えてしまう、現代的な教師もいたそうです(樫葉勇『例話中心細目兼用 尋一修身教授の実際』三友社、1927)。……以上のことからわかるように、道徳教育が教科として学校教育のなかに位置づけられていた頃から、教科書によって道徳を教えることは困難なこととして考えられていました(なお、戦前の修身教育への批判論については、拙稿「大正時代における修身教育への批判論に関する考察」(『教育学雑誌』日本大学教育学会、2013)にまとめてあります)。

### 道徳教育を賛美することは「愛国心」に欠けている

しかし、昨今の「道徳の教科化」の議論においては、先に見たような、戦前の修身教育に関する多くの指摘は、まったく考慮されることがありません。およそ、100年ほど前から、教科書で道徳を教えることの困難さが主張されているというのに、いまだに、それを乗り越えようとする議論が登場しないばかりか、教科書を充実させれば、道徳教育が発展し、青少年の道徳意識が「改善」するなど旧態依然として考えている政治家や論者のいかに多いことか。日本の歴史と伝統を大切にしているかのように喧伝している自称「右派」の人々が、修身教育の歴史を踏まえずに「道徳の教科化」を議論する姿勢には、なんとも皮肉な矛盾を感じてしまいます(ちなみに、教育史学者の佐藤秀夫さんは、自称「右派」の人々が「教育勅語」の文章すらも、まともに読めていないということについて、「教育基本法と「伝統」」(『教育学研究』日本教育学会、2001)のなかで痛烈な批判を展開しています)。先達の積み上げてきた議論を無視するような、「愛国心」に欠ける軽薄な議論は、やめていただきたいものです。

いずれにしても、先に見た戦前の修身教育の様子からもわかるように、道徳教育というものは、とても困難で、複雑な性質を持つ教育活動なのです。ですから、道徳の教科書をつくれれば、それだけで青少年の精神性になんらかの大きな影響を与えられる、道徳意識を高められる——というような安易な代物ではないのです。しかしながら、昨今の「道徳の教科化」に関する議論においては、そうしたことについて十分に考察が及んでいないとは思えません。もう、ずっと前から、道徳の教科書で道徳教育を構築することは、難しいことだと指摘されているにもかかわらず、いまだに、そうした点を乗り越える議論がなされていないということは、とても残念なことです。それにしても、このような粗雑な議論で進められている教育政策のゆくえは、いったい国民にどのような利益をもたらすのでしょうか。



道徳のテキストに見られる、「思いやりを持つよう」という設問に対して、とある女子高校生が記入した回答。「重い槍(笑)を持つよう」。……これは、道徳の授業を内側から切り崩す青少年たちの生きた「実践」のひとつである。おもしろみのない画一的なテキストによって、10代の貴重な時間を消費するのではなく、こうした生き生きとした感性を伸ばすことに時間を使いたいものである。そのほうが、よっぽど「道徳的」ではないだろうか。

(この文章は、2013年7月に行なわれた私立中学校 PTA 総会での講演をまとめたものです)